

II. 特別講演

メタボリックシンドロームにおけるRAS抑制の意義

熊本大学大学院生体機能薬理学 教授

光山 勝慶

メタボリックシンドロームは肥満を基盤とする病態であり、肥満があると高血圧、糖尿病、脂質異常症の合併リスクが増加することが知られている。また、その根底にはインスリン抵抗性が関与していると言われている。また、肥満は心血管病リスクを増加させることも疫学的に証明されており、メタボリックシンドロームに注目が集まっている。肥満とは脂肪細胞が大型化することであるが、肥大した脂肪細胞はさまざまな生理活性物質(アディポサイトカイン)の分泌に変化が生じる。例えば、アディポネクチンの産生が低下し、一方、TNF- α 、PAI-1等の悪玉アディポサイトカインの産生が増加する。さらに、肥満の病態ではレニン・アンジオテンシン系の活性が亢進していることも基礎及び臨床の研究で明らかになっている。従って、肥満や糖尿病を伴う高血圧の治療にはレニン・アンジオテンシン系阻害薬が中心的な薬剤となる。

一方、CKD(慢性腎臓病)が脳卒中、心不全のリスクを増加させることが明らかとなり、脳・心・腎のイベントが互いに密接な関係があることが知られている。いわゆる脳・心・腎連関が現在、注目されているが、その機序にもメタボリックシンドロームが重要な役割を演じている。また脳・心・腎連関の進行に関与する共通の機序として血管障害があげられるが、その中でも血管内皮障害が注目されている。

本講演では、メタボリックシンドロームの基礎及び臨床のトピックス、レニン・アンジオテンシン系の関与、血管内皮障害等の最新のトピックスについて紹介する。また、現在、我々が行っているARBの日本人での大規模臨床試験についても紹介する予定である。

第260回新潟循環器談話会

日時 平成21年9月5日(土)

午後3時~6時

会場 新潟大学医学部 第5講義室

I. 一般演題

1 直腸癌に対してベバシズマブを投与中に深部静脈血栓症を生じた1例

月岡 啓輔・大倉 裕二・岡田 義信

瀧井 康公*

県立がんセンター新潟病院内科
同 外科*

ベバシズマブは近年、大腸癌に投与されるようになった血管内皮細胞増殖因子(VEGF: vascular endothelial growth factor)に対するヒト化モノクローナル抗体である。今回我々はベバシズマブ併用化学療法施行中に深部静脈血栓症を生じた1例を経験したので報告する。

症例は61歳、男性。H20/2/12 直腸癌に対して手術、H20/11/5 直腸癌骨盤内局所再発に対して手術を行った既往がある。今までに膠原病や血栓症の既往はなく、家族歴にも血栓症の既往はない。H21/3/18 CT、4/2 MRIにて局所再発と診断され、切除不可能と判断されたため4/24より化学療法 mFOLFOX6(フルオロウラシル/レボホリナート/オキサリプラチンの併用)が施行された。5/8と5/22にmFOLFOX6に加えてベバシズマブが投与されたところ、5/24頃より右下肢のむくみを自覚し5/29外来受診。6/1 CT検査行ったところ、右膝窩静脈~外腸骨静脈までに血栓が認められ、深部静脈血栓症の診断で6/5緊急入院となった。胸部症状は認められなかった。入院時、右大腿部に腫脹、熱感を認め、血液検査ではD-dimer 4.3 μ g/mlの上昇が認められた。入院日より血栓に対してノボ・ヘパリンを20000単位/日で連日投与を行い、以後、右下肢の腫脹、熱感は消退傾向となっていた。6/10よりワーファリ